中村俊定文庫
文庫 18
996
2

宮城縣圖書

廿五箇條秘書口傳

一一向宗の事

但尾入乃悪智文方のよく守ぬく読ぶようにし

一斉に佛諧あり

但詩連斉小さ弟は

一能吉史の事

但發句は吉史ワキ　能吉史我もてなれをかとは

但囃子方は連句なるとも知る事し

一連斉の事

但連斉は情小軍　佛諧は姿なり

妻敬こく菓かふをしらい　恒根

連斉妙は妻の花のある時は菓かふをしらも枝の白ひにくさに妻は

ちりもてくかく垣根の茶かふをしと雪往旁さくろ之速旁の人なり
姚偕は眼前にくく雪なり

一辛勞偕

唐傍の松は花よりおもしろかりしとすれは雲にもうすゝ事なり
是旁にもうらふ事なりとすれはおもしろとすれは花より
辛勞の雲雲はすくもなり

一むきれ木偕　但たくの字にん屋ん に改るなり

姚偕是むきれ木の事此事は清磐偕にかくのもし

一四季送りの雜

年くや猿にうせやる猿の面
此句雪の年旦にうたるなり
明る夜のかの恋し姫の君

歳旦かくのさとしにくもうたるなり　但好く知るはあしく

糸樣の偕

一宗祇の時代を葉に在れよし宗長の時代四季の茶にて四季
軽かく勅命なくかなふ
但箱は古法花猿裏に白ひの葉をとゝふに樣をのせるなり
老は樣に有うにもあらはんの花はさくらなり姚偕の茶はすくらの是
老に樣の偕

辛さ記の松は花より　おもしろかく
山を樣我　志りける　春雨

茶は皆茶句
さひしきなさの山
歳さふ
さくる庭の
さかし木

山伏の山と一つ　たゝ　たゞさ九し　彦根許六
門出もよし　聖は　たゝの雲　支考

山はまつ、葉を乗し　霞　雪

聲ハ初さへぬ　何もさへぬ　咲

口傳　此ハ聲ハ二分ちて知る座し

同利しくつれゝ、初うら春の

あさし桜の　和木うる法く

右の花ハにせ物取合りたけふれ但し分ち知る座し見の花に

枝あまた生まる迚もかくのちとくもはしくよし

もろこしの芳跡ハ嵩にたへん

右ハ葉の玉の事　但生直の見の花に

永生の花　此さかり　咲まて節果

右此桜ハ口傳一句ハ發句ニ合て座し

切字　發句の傳

志別の事

いさゆくハ　香んみ　さろふ　不中へ

三段切

用小春ふ。　山ありくこす。　初鰹

但同年口

海つら柔　伊せの宿の。　どろゝ汁

父ありさん。　母恋しやしくふ。　都しの筆

但此句をあんずるに紙を案ぐべし

三字切

子規よ。　竜尾咲きぬ。　人もうん。

蛤よ。　伊勢ハ　あまりも月をうつ　絵。

名月や。　あさしもたゝれ。　此小春。

但上下ちゝ習連ぜしす屋し

荊州やりふしくこゝし　雲の峰

但連ぜしなり無る遠此所を考へし

二字切

君火を帯ふゝ相見せん　雪の帯

二段切

かゝ鞋も宮也の夜も　宮の内

大旦し

うちえらしその糸見る　筆をし光

あるをふと初りの見かし　正法嶋

を旦し

糸くる人を　を宵れ月の春

羽衣に花みも　あり我　こツおし

きくても　[二字ツクヒウ]　[illegible]と　夜かし

右小考屋しくるひうふ小さくとゝとゝなるなり

押一字

夕の月や　秋ハ　いろくの姫く心

但やとあるくも秋ハの所ゝ切るなり此所口傳

三足猿　雜の口傳

桃猿を　まつうふ　猿の法ゝ

[illegible]草行

但雜ハ桃猿の所の所ゝ句の心ハさるの尾ハ赤ひ桃猿もそのさとし

雜の句の事

名をなとゝ書しかゝ無口傳

何の木にも花とも知られ見ひうな

但此句のさくらにて屋さくらにしてえんたくぬやうにす色し

山時や春氣にぬし　水の色

但此句のしも文字はさいりにあらはうくのまきいは作るもよし是去

のし文字あり

うな蔵の編の事

さいらひの字はいらしうなと

右のまく浴室のすりいは蔵之此時にも牙三小詞字もて終う

牙三の口傳

句の姉にて四十七字にて蔵の事あり但何と曰りにても今日

から注事

杜若　時鳥　の事ぐひ但二字にもしと云つ字もも不波なきし

にて蔵なり

うな蔵の変句に　にて蔵の事ひ　うそうにて　出来まく　静にて

ちるうにて　何にてもうもしの候事ハ苦しうらはかよハぬなり

紙物之事

一紙何川　但上ニ居る人

一紙川何　但下ニ居る人

是一冊の傳あり

俳諧の詩　但うな詩と云ふ

一五韻にて詩ニ韻字の姉み

一芝尾吟　十二句　表六句　裏六句

但百韻の句にて芝楷物なとにハ神祇釈教恋苦しかるは

一素夷の口傳　三句の門何にも毎桃のたくひこる木植物す色し

時雨は　竪山を尋ぬ雪さしろを云ふ
鶯は　待ちとゝとも聞ゆ雪を聞ゆ
庵は　何られをいひて待ちしを云ふ
樓は　尋れとも　柳は　[illegible]
初雪は　待ちとも　時雨あられは[illegible]
花は　おしむと云へとも　[illegible]ハおしまれ

右故実なり

發句初の字は直論

春ひ実の何しし　殺る初しくれ　乙由
冬凡を捨て此時や　たゞしくれ　財堂
くれなゐの山をさゝらしや　初時雨　希因
初時雨　猿も小蓑をおしまれり　翁

此句の世ひ初の字ゆへすはりうさのぬ所なりよくしたるよし

莚織　仕事も望し　初時雨　麻父

此句の初の字を見しこともすむへ發句に初の字を付する事
此所の所ありてよくしあんす風し

手ぶ蓑の字

[illegible]　さそれ　思ひこやとは　かりやうん
是そ[illegible]の手ぶ蓑なりきり

アイウエヲ
カキクケコ
サシスセソ
タチツテト
ナニヌネノ
ハヒフヘホ
ヤミムメモ
ヤヰユエヨ
ラリルレロ
ハイウエオ

明和三中冬　桃嶺子傳羽毛寫

風

三十三法之事

○屋より本に猶やゆり木や梅の芝
南哲足代弘氏の息に對して
風喩流多古今集の序
○難波ほ小咲や此たる色さきより
今は素頼と咲や古此集
たゞさしきの命へ又にまし多人宇治君此嶺御の後
は即位遂かなる此花此時より初り神書にも樣を此等
も云へ梨諷諫の意之風は相に仍て利の能はるもの人
是教にたゞしい利人虚実にたゞしい虚之文質に
たゞしい文也風働く変文章の体用なり梨
○瘦なりしりなり菜の蒼うな

雅

古今集たゝ出世之事雅の体

○山さ九ゝ多く色々をつんぼる所
むちの色くも風吹ぬ身に

雅風情常に雅風の一体は不名之切字の均とも云ひ一切の如
れ極るも雅の体之風雅の云義の魂魄と云へり雅の体
のれおもへい風用雅我体とせば風を体とする也

頌

○何の木はむとも志ら無自ひのか
いせ寺納の句

古今集祝ひ事

○さの殿はむへも富は栗さうゝ草は
三株四棟に殿はくりしゝ面
とうむくす四むくすに殿はくりせりの事
風雅頌無名の扱ひ有栗

賦

○梅花菜はりこの宿は望ろ汁
古今集かそへ事

○咲花におとひ法く身はあしきなさ
身は吹くつきれいはも志ら無て
かもひ法全身に法くこの事を深し月を含めたり

比

○十六夜や海を窓るなとの事の言
月の志ゝ望ゝ承所海老の窓つくわかるむ天タクフツ比キヨウ
さの集なるへ事

○天下今朝あしたの霜はおきていなは
悲しきことにきくやうしい雅ん

奥

○おとしろしし雪ゆやなるん雪の面
さの集の序

○家の悪魚とよむともはきしる紙海の
古歌の意ゆいよみは魚とも
魚の体をのたくしく興と云ふ紙比興ハ云ふの扱ひ本来
むくさにとのくんと云事ゆあるまんとなんと定家ハも
云ひまひしい古今の大秘変れるゝ

真

○あうくと日魚ハ清れなくも秋の風
意ハ風情にして情より姿を調ふ行ハ意の変革にして
清力にハ意れ一体小結向きるゝ

行

○梅の香にの川と日れ出る山路の雨
行ハ風姿にして姿より情を生きる相ゝ

中

○京清も英ゆんの座にハ七夫来
英ハ曲直にして作の働きゝ

貴井の秘書以読録ニ云不並意ハ流行ハ革ゝ定猿の魚意
といふ意無にして無ゝ色の系筋残れ流行ハ世の事れ世情を意
無革ハ世情の解けきるものゝ貞室秘文録ニ曰意ハ印
体にして知に立川のてくく行魚事紙れ姿ゝ総こと遊
遥ゆる姿ゝ革魚居をみそしてきり荒を負ふ山人のてゝ

口傳

文ヨリ教ヘヲ顕ハスカ俳門ノ大伯也然ルニ真ニテハ能ク教ヘニ進シ故ニ
行ノ文ヲ以テ風雅ノ体本トス行ヨリ真ニ静リ中ニ働ク也行ノ一体カ風雅
ノ尾ノ居ヘ所ナリ是ヨリ詩歌ノトリヨウ也

大集伯

○雲おくく人は体むる月見ゆ
西行法師の弁
○中くにおくく雲れかく類さ抜く

月をもてなす事なれり常楽

換骨

○梅さかりに松を沖前に度此月　支考

菅 神の梅は花ひの沖縁

梅樹松の詞をなしつゝ夜の月の白地紙添くなるは此作の

働きと梅樹松を夜に殺しなす

裁入

○桐木に鶉鳴なる　塀の内

後成卿の辛

○夕されば堅造の秋風身にしみて

うたゝ鳴なる　源草乃里

飜轉

○神垣やおもひも加茅に渭禁縁

亦宮の女帝の辛に

○神垣のあらりとおもふ玉をしけ

おもひもしらず思瞳の事なり

結前生後

○山里は万家おそし梅のたゞ

前小おしゆる地を七条字に立てしゝ梅後の一条を句作家之

前に結ぶる地も後に生じたる地も同じ心にして前後二ツなり

うゝ働せたる句作之後句万家も山里を生じ又毎の茶

も山里は遅しゝ二ツの生きを一ツ遅きに作れるや

口傳

現在に未来をおもふ句法

○えらに因毎の日を悲しきり

○草種や花はさかりを雲歩行

芳は花は夫に月の秋の名所なる文科や性格山城おもふ

句之後は花は盛に万物の月の雲をおもひ此草種の生

ある時いと草名月を紀せるかく

現在ある法

○時多西月是毒の花さかり

○登人に多くて取もあらとしの蓍

前章ハ印の蓍の場所に時多を初夏の頃すべて初春の頃
蓍れ初春我もしハ梅の蓍れ盛なりしかゆゑ名多名花我對
しくむの蓍れ志としく云し我実に風姿の後生を愛し

間架

○名月や雨に蓍しき顔もなし

詞中の蓍れ字におかれも歩ぬ雨の作あ梨て蓍人の立れ
一峰に重むと云へるも月のゆゑなし実我詞中の間架にしてユ
面ハ唯其法沙髪氏在なとの打向ひ来る月の方に月をもいて
是そんもれハ人のをとりなる此業平閑艶翁の嘆息をおも

ひ歩せしるへ

他業者作化我迷ある法

○不生きかゆき起されし美の雨

○髪をくくる雨眼考し十月雨

○木枯や同らされ痛む人の顔

春の雨れ匂ハ蓍の父母ともいへハ蓍相ふれく志ちも美の雨の
春に芳をおし去顔宮をおる時ハ此れ多粮なれハその佐保姫の
流乳しくかゝ起を思ふ之を云へり

二月雨の匂ハ又蓍木成り山井子を渡り歳日も咭をうはくやる
ゑ粮を出髪をさ先たる人を添ゑ森雨作化の万物を見せたるへ
木枯の匂ハ嵐を帯しく此下しく枯あらハに蓍かれに和蓍ふ
も蓍も敬枝折らるゝひしらゆ此れの姿を同らをまし痛こそ

にかしこ人を説之是等の所極例之

説ノ体 ○此句推以せよ並に句意一句 翁

此句是支考の東武行に餞別の句なしと是ハ喧欲の車六欲の
同にまる所く調れハ百里の句意にハ大小ある物へ人心のおかし
かくるるの躰義生涯れるつきてあるる句意一句雑なりし事之

○じつ句意れ梅の思並くんらるか

是也及理を十七文字に言ひ旅しるく残説の体とぞいふ之

変態

○田一枚植て立去る 柳かな

西行上人の名所蘆の古跡にてありし句之 西行法師

○道のべに清水流るる 柳かげ

一志ばし迷ておく 立留りぬ

田植るを見て柳陰の高かりしハ風姿有りて言ふかハ事をなも

ひきしる小風情しし之

林田志ハし迷をるハ情く田一枚ゝ移しある庭へ余ん

しるかる之姿め情ハ画小種して見れハ別なく

対句

○「対句」菜の花しるく並の子払ハ

対之

○見もせぬ旅康の果や 秋の暮

おもしろ之

○梅の高たの川よりのもる山路か

おかしき之

○されよの薄かる柳の志あへるか

さびしき之

○古池や鐘花ひきむ水の音

五興

○名仙や名る、藻子れとも移り

双関

○「雲」雲雀鳴く中の拍子や雉子の琴

一段高脚

○鶯や柳のうしろ 薮のまへ

鶯の並一つ出て柳薮へのまくしら之

二段一師 ○僧頼義死ゆる事の松
尚ナホミ一句之

影畧覚 ○菓にかく案ぶれと雖故は青月秋
月と菓とのおもしろき事も似ひ頼の菓成るを案ぶれ
を立おしふ青月は雖故まで見事れといはれも古き頼を
對しておくとなにはとの字助字之菓と月と体を立ひ
て開と異しなるか頼異なり

乗巧 ○夜月や云りも常の秋には似ず
是は生雲れ七夕の事は云外に置て云ると生れ立意に置
厭も習之の生れ川を滿て逆ふ星れ立負り働を乗巧と云
○月花之事并月と夏恋句之事
一月と以ふて秋季に於る事は月は三秋冷色の形也

一月は花より数の多き事は月くに月はあるまゝ故之
一月好と云る時は好季を出無法之秋の三句目之の内に当月ある
屋し当月に及ぶ時のいはれも去れ月とゝふ之月を去
れ小法程れ二法あ梨

法の法
○好きつや朔日汐の星志らみ
○さらく松の丘方に稲の香
○姨捨の方には誰も独ぬれて
よし世姨捨に芸月をふくむは句体の働きなかく芳句にうばる
と稱ら思と成ふ事を屋し稲の香れ脇成四毎れ稱りと
見てさみ集雜の郊の字家のあるかなくなかつ四川さらし
あや姨捨山に照る月を見てくし此字の照る月を姨捨とて

日星の拾合をのうましくあへ

弱の法

○あらかゝ○の革にくせ貪あるを

○秀宮は月の名を流れなし

弱くさゝれ月は方向より月を用ひかゝく月の姉を作れは多くは
嶋とおもの人二句一言にて二同して十月さ思あし雖ひ人

○宮闈の事 あく宮の言し從あし嫗を荒神の事に用ひたるもあり此句はあく宮なり利

○宮闈は あらぬ神の言迂し

○初より萩の風 蹴しをう

○八月は旅面あさ 小幅 巾

宮宮とたゝ栗は月にあらぬ人志うる我子傳の忠近月として
撰集せるもあ栗とるへうあ笠は言迂しとふて秋雪に

さる事仰坊の為迂言必九月中面ありさて御迂言は南面にて
来る人は初面人猶萩の子に神風のあく雖ひをもて月と命を
るものへされとも始ておさなはれ来る雪法也月の学なさをれ
とひ八月と月次の月我おしかふ笠我弱を法とふ

星月夜之事

一星月夜秋之月にあら無發句の脇にもらは言ふは素秋に
しく月の産まては他の季有時弓張なと美名の月をすへし
素秋といふは星月夜の時をかりすると

一月次の月は美名の月を作る人但五月面にをきて堂れと
かなかし書也月を自然る古語なり

一毎月第月第月七月は少しの會秋にて月に有る法人傳

花之事

一花と云ふて春季に如事ハ花ハ三夷殿色の姿へ

一むかしハ八朶の花なりて雜の花の拍なしむかしと云ふ家

故而夷季にとて拍却なる也但是花花橋夜の正花へ若葉に

花をむすひても正花へむ火ハ秋の正花なり利解花四花冬の

正花へ

一月花春へむ花葉子細其句作にして雜となり夷也なり

むかし深川ゆく

むかしハ句作ふ和にて雜なりまを前春ふ拍

ハし書なり利

○妾姉より立田の紅葉ふ志賀の花

是春季に如事なる口傳

一初折の花宗匠の巧者のこの人

二人二花ニ事

○葉の湯といふも是ハ其の事

○肩衣小花も咲ねハ世代拾ひ

主賓花ろく火神詠 鼓

○肩花に二夜ひむの咲ハ一夜

右二巻一花のあし雜ひといふ一人二巻ハ其事なり強くなる

時ハ此格なり利

一樓に花を消る事

○辛滂の松ハむより勝ふ事

山ハ樓ハ志なる 春雨

○樓咲時ハ心うきに うき

舟ハ歳末ハ花をさす

若辛ハ花よりと云葉の花なれハ山と滂と我所を遠へ滂ハ

辛滂山ハ長谷山へ芳の花と一所にあるゆ樓に作れ許ス後

章ハ花の様ありく大概に常に花といふ也故に家木の花と指すせる花
を非する故ニ此例ぞ花の句に桜銅桜結の文作ハ作るもの也
一箇條ニ伺花ハ桜にあらぬ桜にあらさる花あれバ是非ずる秘事之口傳
柳花とこハ桜を初として萬花の葉之仮令ハ百千鳥とてハ鶯
を初として百千代鳥の轉りなり
口傳　章に

○百千鳥さへづる春ハものごとに
あらたまれども我ぞふりゆく

発句に

○唐土のよしのハ花に目をとめん
此発句の初折の花の座に唐土国のさき山桜咲ぬ東杜丹ハ唐
土の花異之桜ハ我が国の花の王之和漢に花王と対せるを見て

花の座に桜を留しむる非之従花の座の桜の事ニまく子細
ある事なり
章ニ花の題をとりて桜花とあれども桜の題を取りて
桜花とかくして八重花之題を留たる所應し
題之子の章

○あし曳の山の山守もる山も
紅葉せさする秋ハ来にけり

俳諧

○たくの構に蕎銭　詠し
蕎の唐き花の姿を見るもの利
前句を章に書ても定に万葉雅の章をも句作りかかり
に起情の一段を出ずは木もしらく用ひぬ滿て作べし

雪の白河集に

○淋しかれ梨なる粉ちりし礼祝
さびしさハ柳赤くして秋の風
世評の発句をいふなれとも柳と粉との不来の解しさ
えひら帯をもろ名ハ生きて撰集の未世ニ渉り一考ニ志ゆく
一ケ所ミくし悲ふ好む人少かく哉
蔵尾

○秋の夜や山鳥の尾に世の人　ちか彦

○辛崎の松ハ花より朧にて

前章世の人といふ歌の文といふ俗語ハ世の人そひといふ
事譚ひなるの蔵尾なり
時花人感

○梅の花や吉野国の朧月

○いつ春ハ名なりし矣の国ハ涙
芳草ハ来鴨の跡より雅猿丸の声

○矣山に紅葉踏わけ鳴鹿れ
　春や時ぞ秋ハかなしき
ここなるも秋ハ何時紀かなきものハといひけれに紅葉ぶりもちり柳もて
くに妙深き矣山に鹿の鳴時をかなしといひ世間花なる寺く
そのおもく朧月哀れ深き時ハいはの花ならぬハ月も五き
浴まも桃咲きの梅の春隣に静なる時哀も深く雲りけれ
まの忠月殊に口ひくなる会ハ深しとの時の一字に感し
えひとけなるへ
広章も花淡を挑くなれしもおもひを流ふといふ杜甫が
う御をくも実ふの忘とある時に山川景物ニ対して伊藤ふ

第三案季節別當時名ノ意て

藏頭又次小松月ほうなしや　桐の花

是ハ清少納言の枕の草紙にかかれたれはうなき様しをて
んとかゝる言葉をみ文字上に居て又次小桐の花の字を
るより言葉をそえて作れるなり

後段ノ切字

○ 咲さらハ雪ともふらん示すまく

是ハ上のみ文字のかの切としらへて切字としへる也さハ言葉
かゝらなはという切字のみ字にて人の友を誘ひたる
言葉なれ判談あれハ疑切と也なり

○ 植て死ぬ年あいてえ縁の葵

是ハ中の七文字なれ云ふといへる言葉の下に置て縁のむかし

浮世を歎し人も無常を知らぬ身をそこかすの下に人みの新
おく是を中の七文字の切しといふ

○ 辛崎の松は花より朧かし

これハ下の五文字の下に朧にておもしろしふしてといへる也
情ありて言葉の続きなく下の五文字の切しといふ下の
五文字比切しいたるまで惟情と言葉の続きされは格調と
なりけらなり

○ やさしくも茂しふ月の雲

是ハ豊前の詩をとりて十七字の中にて二句あまりて作りたる
なれに是を中の切しといふ

○ 人に志を実かせて雨ハ年忘

これ是ハ下の言葉の文字あまりて是を撥の切しといふ

雜の句○○朝よりを誰まつ為そかいこう

○かちなくは杖はき板を蔵るうな

雜の句此事　和子に雜の雅といふ事あり多ハ花多風月我用と
せり実に各不雜の句宵に事ハ当季我いひ作之我い
ゆんとする事作たたやうなくさる故人ハ章ハ雅称と相と云
へ片さくろ沼とさふ秀句をいて作れり各不の秀句のはなき
有事故実之後章ハこると杖との作之ハ雅と也梨されハ前
人の平を驚ふ毎日との事なくハ無用の事之

雜の体

○地平角ぬりかきよ須ア明石

是ハ須ア明石の勝景を辺をさめてワのちかまりいとそふ
作之を地平に角のことに蜀と寒と西苑の國ありて戦ひ

出せるといふ事荘周うそかふ猶深氏に須ア明石ハ主後ハ日と
明とそつ事にすかりて地平に氏二京を猶負せよといへる
ハ当季の文なるかゝ深かりとれて須ア明石の体となる也

雜の雅とんへ梨

無季の括　羊しゝ　猿に名せたる猿の面

是ハ古く来たる美陽の姿刻ふ猿と古るとの害をいて
実に一つの感を成せり句面に当季の詞ハ見へ孫とおの句
かゝ異也と云へくりたうれハ当季の体をいふ或ハ用に
立ひかきもそ季と云ふ我此括の働とする也

四季括　○七浦や　アラ子れ　鼓我　アラ子　東花坊

是ハ花の新聚之湘南の新昊也作る人家も雜の句なかり
何の季の我猫にしてもおけふ偏をいふ也此季の括と言

此句當れ編明りて

右雜の句四体

疊字疊語に

○○

疊字とは七重八七重とは世を言ひの事なる之所見是異の山は
山なるとも亦山もとよめりて古世の古聖の山とよめるのてくに得ひ
はく年事なる之

疊語は於なし事なかりて疊語を疊字を雜をつのちまる語
にも山雀は疊語なる之に橋の山なと作れるをいふ

一俳諧會法式之事

一五段切字惣而一軸之事

一蕉翁三十三法之事

一曲節地真草行案方之事

一月花之句法并悪句之事

一疊字疊語之事

以上

悪句之事

詞の悪をとく無情の悪をとるへ伝令は神の霧悪之句体に賢道をつ
れは神の霧なと悪にあり無物と以へは志なる夕頭は神の霧さ
れは源のんもあれは悪悪所をの之悪小人の悪詞の悪といふ也
全之へは悪句人なとに所をこの句目の悪句打鉞さはかしき所は
まつ句所へ之まつくも所かしきは時は言令は捨ふまふ芥子に

三月小波が季なりと芝原なくも出来ともいふ事を案内をなすこと
ゆ又は発句を傷而出しのなりしてハ居而山川の姿を定むること
西對　○山川の水ハ流れてその鉄　乙由
　　再伝ツうちに夷ハ薄行　芦丸
行ハ流れてといふと夷ハ薄行と西對ゆること
反對　○木枯と一度に休む柳の木
　　丸雪に玉にやりて行る
柳小休むにあらるれ強くとの反せること
氏家流浙の月、挨拶、柳子、三葉流浙さまくあれと氏二郎にも
ること不能波為ゆるといふハ弟一芝の中に少一枝なこと
　○いろくれ名もまちとハし夷の草
　　うしれて蝶の目を覚し思る

芝草と蝶を對志出ること　口傳
古格ニ　鳴ケキ　花ヘヒ　加根に舌動く文字なく為ゆるといふ事あれと
今ハ生沙法なし

強章之事

○古池や蛙花也む水の音
○辛洋の松ハ花より朧かく
○あかしとりハ難面くも秋れ風
○原陽れ木模ハ一るに喰れ
○夷もうはこ年名とこの月と梅
蕉翁の五種　古来元新定之

追苦の格之事

凡追苦に親疎老若男女知少品今に意志のみ而作に

ひとて特色かゝる事

親之部

○秋風に折れとし悲しき柴の杖

是ハ松倉嵐蓮を悼ぶ句之悲しさとある色を深を悲しきと切れ字入れさるも追善の一法にして哀情の深きもの人 追善ニ切字用イテハ情淺シ親師兄弟ノ時切字ナシニスル事ナリ

妹之部

老医のみまかりあるを毎ゝあはれとも才子とも追善れ句を見し小

○六尺も力にとしや五月雨 其角

老之部

○蓮の葉れ笠や雨ゝ忠孝安 乙由

若之部

○宮蝉やそれにかゝみの為目鐵 茂妹

男之部

○梅木ゆゝ新明夷の匂ひ 春波

女ノ部

○ノ子句にも其新忠れて女帝花 茂秋

幼少ノ部

○鉢魚れ花を抱けとも志ゝさりき 春波

追善とハ生人の善を伸る事ゆゝし多くハ御佛作善の句也

○音楽れ本視ぬけ者る蝉の聲 曽北

追福ハ当その人の寓生成ハ徳利なとを慕お梨追蝉ハ当愁歎の情を出る也

○悲しさや古に蒲雲も若やかれ　其角

一詩絶承流に聞くしき等の言葉ふいも屋し

一中花なと書たる經冊を受信書へし　此石雲うち日雲り

の經人ならハ花ハ花雲を上トせれと追悼ハ紫城上ゆく

志く書屋し

即今作例

○風に乗りてみしかれしも雰の人　幾晩

遠忘　青丹十三回忘年とりさし於金城

小舎行

○山の端に月の後とや迂　樣　二

曼洞雲彩菱川香画師ノ名誉ヲ演ル也

第三の章

第三ハ三の情にて物ちるへ編ハなるんのをしめ第三ツ起情の初り

曲良地志草行のあはうひなへ発句志ならハ行草発句行

ならハ志なと句を作るへ

○ニノロランロ小ロなれや等の為めハ発句にもまこふなとの曲の義

の葉ちる花に変ぜ来て

又是らの人に能業にかく為ぬハ発句行なら如是

なんなり句ハ曲良あるこの人第三ハ一曲一義へ

発句ハ為ぬり為して為の第三にて為の事

ハ為の発句に第三にて為ハ押字なくと叶ふ事頻にて

其事にて怪事にてなくしてよし何となれハ頻ハと此

とも其事ハと此人ハ花に発句へ通ハ如なり発句ノ小字クハクルシカラス

発句ハ此り此ハにて為の上に志かと字を重ねし

減らく空にての類なる面し

しく留の方三にノ日亦波入事を急ハしきの上に置置し
たとへいにしき越しきの類
又しき留方三ノ日亦波入不中の七夕字の下に置とも必利

顔字留之事

望の日集に

霜月に鶴のはくく並ひ居て
望の鶴は食ひ物事
撰擇山東の作成木葉降

蔚すつおふむ〇獨の顔字の結のもしき對を有也
す事し
古拾小枝ニ月高き亦あるく知る事句文字にて留る
ゝ以ふ事ありされと舊つのハ是にも有ふ是にも限り

ぬ事有利

四句目之事

四句目遍句初り今の情にて但結て後に作ある一し赤撰
法師の人をいくとゝ云ふ事ゝを人いふ所なりと定し
そうる事四句目は工まへ
三ハ天ノスウ四ハ地ノスウ三ヨク轉シテ四ヨクモノヲ産ト云秘変ナリ
五句目ハ地の句會秋の初類なし
六句目ハ地の句
七句目ハ月芳呉をぬむへらし此月の結ふに有利
八句目　月をあし結ふ者に秋字ありと知る事し
歌仙行の時五句目地の初りし

三十三法之傳終

連歌式目之事ハ人王九十一代伏見院御宇建治二年鎌倉藤ノ谷ニテ爲想郷作之又一百代後圓融院御宇應安五年兼良郷追加作之百二代後花園院御宇享徳元年今案百五代後柏原院御宇文亀二年杜丹花ニ勅定有テ又作ル建治二ヨリ宝暦二マテ四百七十七年ニ成ル宗祗年元二百廿九年ニ成ル

俳諧歳元　後士御門院御宇山崎宗鑑文明六年ヨリ起ル俗名支那孫三郎文明六ヨリ宝暦二ニテ二百七十九稔ニ成ル

別傳

翁ヨリツタハル書之事

一古今序傳　一百人一首秘聞抄　一連歌ノ新式書入

一埋木ノ傳書入　一白馬経ホ五ケ條

翁ノ撰集

一猿蓑集　一續猿蓑　一炭俵　一曠野

一春ナリ　一冬ノ日　一おくのほそ道　右七部ノ書

（夏ノ日

明和三初冬自批嶺子傳羽毛寫

梅花傳發勺ノ巻一目録

一 剛柔之傳

一 十八勺法之事

一 五段切字惣而軸之事

一 明鏡白砂人集大略

剋粟竪横傳

抑發句と云ハ月雪を吟ぜんにたゞとつ小鼓句ハ代よしく句作に働きなくして志草の如き義十分なりとこゝ是

称りたゞ是に剋粟なり或ハ鼓句を題に剋粟ありしを句作に雅俗を味ひ事へ剋とハ横題にして蓮縛晒布

煙拂晒の類へ是ハ雅云の粟を作製し粟とハ

竪題月雪花吟ぜんの類へ是ハ俗語の剋をなく句作

竪題ノ法

[illegible]（俗也剛）[illegible]（竪也柔）[illegible]の[illegible]　翁

俗語の則いと製さるべし

横題ノ法

[illegible]（雅也柔）[illegible]の名のあるまでも[illegible]（横也剛）[illegible]　仝

雅言の柔に製さるべし

題と題向とに則柔の法

[illegible]（竪也）[illegible]（雅言）[illegible]（横也）[illegible]（俗語）[illegible]（横也）[illegible]（俗語）[illegible]（雅言）[illegible]（竪也）[illegible]　支考

[illegible]（横也）[illegible]（俗語）[illegible]　仝

芋ハ横題なり[illegible]ハ柔なれ題向の竪と芋のさんと

芋と俗語[illegible]の[illegible]や雅言なれ製さるべし

題も題向も則雅言以製

[illegible]（雅言）[illegible]（横也）[illegible]（横也）[illegible]　支考

[illegible]の題[illegible]も[illegible]忘も同じ横なれ則[illegible]に

[illegible]小[illegible]の雅言なれ製さるべし

題も題向も柔俗語以製

[illegible]（柔）[illegible]（柔）[illegible]（俗語剛也）[illegible]（柔）[illegible]　乙由

[illegible]も柳も梅も竪なるをそれに[illegible]の俗語

以製さるべし

心詞作法

[illegible]（心）[illegible]（詞）[illegible]　翁

[illegible]

一得ある[illegible]則柔雅俗をまじへて[illegible]

も[illegible]

題ヨリ趣向ヨリ作ヲ求ル法

古池や蛙飛こむ水の音　翁

（趣向）（題）（作）（作）

題ハ蛙也趣向ハ古池也此古池より作を求るなし

作に遥情を求くらし也

趣向ヨリ作せ題を調ふる法

卯の花や鳴る柳のおもひ哉　全

（題）（趣向）

題句を柳のうらうら事を云て卯の花のおもむきを調たり

十八句法

真ノ法　初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　全

（五十三法ニ）あはれしきおもひ出すとも秋の風

風情ありて情より姿の調和也

行ノ法　梅が香にのつと日の出る山路哉　全

風姿ありて姿より情を生ずる如之蕉風秘義は

此句の下拍子に占ゆかり

草法　京にても京なつかしや七五調　全

曲風作之一句を求めし従三拍九拍有為の整小

くはしく弁ハ従口伝

蔵頭法　又沢山おもひ出すしや桐の花　支考

法ハ調言能の章句に居の如く日はおもふ事を云むとまた

ある事を桐の花も家にハ云ひ出すを上下

ふハ百女に詞をのこし又吹くも発したる様也

右草なるも用ゆ之

蔵尾法　秋の夜や山鳥の尾に是の人　支考

人語る女房のこゑまださはしきさる詞之尾の文字

の中にきき、[illegible]をのさきり

二十三法 春待れ 松を[illegible]より おりつまく

句對法 菜いろ〳〵 [illegible]花の手かしかい 翁

色々多ことゝ對せるへ

意對法 列小もさぬ 旅寐の果や 秋の暮 全

元祿甲子の夏江戸を立て方々 杜撰ありて 黄濃大

材木図亭に忘しく 晩秋にさ衰を嘆くわひて

の句あり 秋の暮と旅寐の果とをくらへれと

の意を對せり

字對法 床に来し 鼾小入や きりくしは 全

来ると入るとの對なるへ

互照法 水仙や 無き 漳子のともうぼり 全

漳子水仙ともに無し 実を互照の働と云り

本語法 仙令講や 池のせしか 涯五拜 全

日連上人乃貞筆小大根五本涯五拜 南無妙法蓮華經

廻向しはらく有り 鉢の閑を出た白紙小用多り 此外古今古

詠ありて用ひ作るへ

現在小過去を悲ノ法

二十三法 [illegible]に 正月ハ梅の花盛 全

[illegible]人小[illegible]ふ 夜もあり 望しの花 全

[illegible]の初春 [illegible]しハ初夏 梅の花盛り 然しうかり

郭公の春ハ初夏 [illegible]花の盛り 然り歩も云とし

さ云 [illegible]の花あり 実小名ある花の時 [illegible]を知らせ

現在に未来を悲ノ法

辛三法

元月に同毎れ日ちてこし花　全

芋種や花の盛を賣あるき　角

花の盛に對しこし清月を思ひ芋種を賣り
夜延て葉の秋風の後は月の盛り成金し
未来を知るよ

結前生後ノ法

山里は萬家に生しむめの花　全

山里は雪に生く清く万家の来る夜も生しと
前を結て後梅の咲るも生しとつ字を意

双関ノ法

霞雀の働く

霞雀鳴中の梅子や雉子の聲　全

中七文字の梅子に霞雀小作仰雉子小俯春の
世所を云

鎖詞ノ法

名月や湖水小うかふ「七小町」（字眼ナリ 鎖詞ナリ）　全

月を美人小喩くたるは和漢同しきる城右津
七浦小美景を七小町小喩て清ふの鎖詞ニて
月軽と伴と合して清ふと作る也

影畧互顯

菓子出て東ふれと難波は霄の月　全

軽畧は景景相の所のみをあらはして用を云ふ多
くは賦の所あり朝菓を見て奈良を出雪の月
は難波なるとあるは難波の古き都を對
し菓と月とに俯仰ありて菓の息月
の色は京都小生る所也ちふれとの子を波は助字
と知る事也

引縄貫珠法 梅花菜ゆり出の宿のとろ汁　全

賦ノ称にしたゞ三ツの新和を入れて一称とせるべし
三陰切の一名と知るべし是ハ乙別を東武に送
り給ふ句也

反覆法 卯の花や閑き柳の及び鍼　莽

当題の卯の葉ハ作り出しく柳のくらきに
きまをのへ出るべし柳ハくらく葉助とハまと
より禅語にも是亦卯の葉を怪しく柳を主り
し依反覆也

錯綜顛倒ノ法 己ゝ火紙木々の黄や葉の宿　支考

木々の黄ハ己ゝ火紙花の宿としたゞ左のとり
上下にかしへて作きるべし詩音を倒せく左に如き

香稲啄餘鸚鵡粒
碧梧棲荒鳳凰枝　杜子

「貫反の実の清水小鍋見へし
今やひくらん重月の駒　貫之

此新ましてゝ作りて詩ノ手象音に餘情似借
に句ひ有文も実に手象餘情にして文と成
ものへ是亦の句法を面白くり透ひ其法
格を離れて餘格小あれ如くし

弄巧 又月や六つも老の夜小ハ似安
是も古今此七夕れるハ三列ニ出て云て
いれ云ふ事ハ厭も翌れ五九川を渡て返
ふ是れ云る偏を弄巧といへり

十八法終

発句の切字起りし一軸の事

切字と云事ハ和歌にハ切といふ字も法の名も知る色なし
抑連俳の発句に切字を入る事ハ いつの頃にや 昔日和尚三十一
字なれハ文字数も多き故 切れ字の扱ひなきかといへと幽玄の旨
言にも切る訓なきにしも非す

桜ちる木の下風ハ寒からて
　空に知られぬ雪そ降ける

かくの如き言葉の切々をもいひ連ね 俳諧の発句ハ切字の入たる所より
上の句下の句と分割して一句二章の発句と成く和歌の上下の句
此たしかなれハ十七字と落く言葉の原理を云ふ扱なれハ切字
のあるへき事なく

心の切の事

一 上五文字切

いさゆかん雪見にころふ所まて　翁

いさハ切字にあらす いさハさそひといふ下に従ふもし
切れ字の略字なりとた言ひたる人
誘ひたる言葉に勝るより切字切

二 中七字切

頓て死ぬけしきハ見えす蝉の声　仝

見えすと云下に今の人の言ひようには花落
ともいふ年老の嵐に誘はれ散る知れ難けれハ
蝉のあはれさり言ふにあつるとも鳴きて
従乃空花と共にはかなき事のあはれなり
実に変化の無常したる情の結はるる切字なり

三 下五文字切

辛崎の松ハ花より朧にて　仝

朧にてと云五文字の下に松ハあはれ小来の桜

中の切

挨拶ノ切

二段切

三段切

二字切

三字切

玄妙切

連哥に
蕉も武蔵やとらんあつの筆
是好学を新に入たるこゝ也と別れ称ハ我家ニ小ふ名
蕉も衛年吳門ニ月と梅　箱
河ゆくとりハ雖面も秋の風　全
此名の古事なあれとも雅格のことを二字しとて用ハ
されとも強くしたい此句玄妙雅とも云へうや表ニ小家
石をしこ情ニ切たく風の句とも月の句とも見へ
孫とんこ気ふ字つくしかの理うゝ若なあり宝を
吟く此句の全とせ家う
古今物四此句多りにあらはれ秋風にあらはれたく秋の朗詠
と云へしやうし所合の平句ニハあらす多句別ニ嘱嘆
の余情を嫌くとゝ多句ハ性ニ多句あらんにハ是等や

玄玄ニしてく衆妙の切とも云へ者れと字く学屋
うゝもあらはれたく寄屋うゝはたく敬しくをさ
くしこゝ神助の所結と云屋うゝ下界是ニハ万味の
後透得ニ色し結口傳
連哥に
桐ゆし嵐や雲にかすむらん
切字交たるのこゝにしこゝ玄妙の方こゝいうあらはれ
桐の木に押鶴鳴なる抱　嫌の円　箱
ゆく押あるとこゝにハとある事にとる之る抱字あ
於廻法
青くらもあるつゝ抱を押屋かし　全
ても抱屋たるまゝにあくとある事をとゝ思ふ之を押字之
春改日小早りを旦ハヲハニカラル此押字抱の扱ふ
日寄之　廿五ヶ條譜　茶つる人我と書此月者

大廻法

何かなる春の日の光　全

春波日表ハ切字なく何かなる春の光とも日の光とも
一句の内何もうとう詞の通をうたへ終日俗なる
春波ハ日想る發句ハ五七五の差別なく切字なく
とも所格あへい取字の發句とうたへ
白砂人集わたり上て云ハ切字なく芳朗此亦日連亭の
大見しより切字なく俗文し俗とつ生つ度も中に志
こゝ差なし切字深山なれハ人よくきて志り面なり
やうにせよとうへ此ハ今一之切字なくの發句俗文
せぬ人推量なくしかし俗れと一ツも不合此事
不足俗文なれ初句の中ハも切字なしの發句を抱
俗文なけ也いたて書ケ人宇通の慈悲なく初句より

俗文を屋し抑切字なしの發句俗文なり時いなく
こゝも音ハ小事なり五七五句讀の差別の事へ

十九平介於波

連　蓁をさして植屋うゝ屋に宗干く（あれとゝ云意ハ法く）
花をさしてあれ植うゝとはゝうたる人おゝ花をこそ
とゝ云絲の云意ハ法くとハ十九ノ五ハ云ふとなり

下句

手留り

俗　陸子に月ハ云くとしく
連　涂うゝ以ハも入のとふしく
月ハと地名ハ居る右ニへかゝりて氣情をふくむ花
章ハ月ハと抱後章ハ山ハもと押つて返する是
も押字抱字の故へ
ハステ　あらくハハとにさくて
以よりこ字ハ入てハ小と爲ハ法

みツの奴の事

畢奴

ぬるゝ通ありて美奴は奴の類也

不ノ奴

清かれとて牛ハ麻あらぬ美奴

ぬるゝ通ハぬるゝ奴行ぬの類也

隠奴

ぬるゝ通ハ思ひ事ハ人の篭ふ所也

詩 ニ字小 詩ハ通ふ所ハ多くあり

歳夜ニ麻ハ見ぬ 練 紵 の笑也

秋の蘿小 又 灼 蹤 見ゆ

見ゆる小 異也 見の字のよふ ウケスツヌフムユヒ 此字也

白砂人ニ 拙ゝ事ハ見ゆ事ハ拙ゝ ソひとゝよふ拙ゝ事ハ拙ゝ字ハ

ツく事

梅も 樣も

しきぬる 四つ 也

手打 法

左方上方小ハ世思事也 愛小 及ゝ 言り 時ハ一ツの名あり

下句の傳ハ二ツ 高 也 ぬるれハ 異也

ヲ世 字 ヲモ ヲトハハニレ 白砂人集 ニアリ

飄草 小 ひよとり 上ノ 詠ハ

梅兒

是ハ 中ノ 歩集 ニあり 口傳

上の句て事

白砂ニ元ハり

此二字ニ無し

押へて 通也

さりて事

田面の 徒 さふ しゝ さて

是上の句小ハ左方なきあ志うし上の句とても有傳

なし 愛 ふ 通し さて 其れと云ふ也 除く

くす事ハ又上の句小

伽 生 涼 ゝ 法 ゝ 其の事ハ 此

是も さ 称 と 除 也

下句に留り　雲雀は上に引く眠の下たに
七字めくるは切は留りて但しくほかにも
このたとの字上にありてはにと留まれ
色留　其の色は櫻に似てけんけり
にと押字の外は詞の不以波留まれは留めぬ但しくほかにも　云有

五段乃切字一軸終

かは留りかも留り
やよ人〻類岸の雲は花うも
まさくも岸れ雲はかくらは
留りしるかは加も　ふ見のるかは

明鏡白砂人傳

夫和哥は神明の内證佛道の妙理也人皇十二代景行天皇の御宇
日本武の尊新治の筑波をすぎて都絶る旅ほとりて上句を投かけしるす
しり給ふ詞継は名高の子の浮橋のむかしにらくう陰し乙女に思ひ
ぬるの事あひしよりさらに世人號の事二神の神詠三十一字の
作新治の発句の格別なる仕儀尾末に於て絶んなかし比一首は十六の連
歌の起絶紀しるふし天正の頃のや三井寺の法橋紹巴の
玄仍に授かりし所を深く心を布秘写して真に傳ふるとも
絶ん深く何才子二三子に可見る必ず宝とせよ人に見せるへからすに
傳る事有りれ
一発句に切字の事は初字の内切字五つかし　とも本つ
の格あり一に一は歳見のか二つにい新式三つにい深式四つに
い現世の外に有之現世の外に切字切て又外にも第一に其五い

[illegible]

山をし花田へ日雲る霧代

是しら切る[illegible]

連 あり祢さし出くも日雲る真見代

是現在のしなれともさし出るとはしらぬ[illegible]

[illegible]切の秘事也

落着哉 連 俳 [illegible]の笠落し出る 挟う[illegible]

願哉 連 俳 [illegible]

浮哉 連 俳 [illegible]掃に包う 掃は[illegible]

沉哉 連 俳 [illegible]

現在哉 連 俳 [illegible]

呉雪

一やとこしらしいとは[illegible]れとも口合のやとし是也此亦[illegible]

[illegible]坂や[illegible]

掃[illegible]

連 [illegible]

俳 夕顔や秋は[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三川哉[illegible]

三ツの哉詰流さまりしあれと我家にハ歌平哉差別 吾那ハ詠嘆
の餘なるへ古歌に七ツ八ツのかなあれと只三ツにかゝる也 治定 字定 にも
代ハ疑辭と称嘆ハ達へり実さんく和漢の通義を交ゝ哉那歌
那平那の分別ありまし三ツとハ治定と称美と嘆息となり

寿りさくまゝ九日の登山代 治定之
木のもとハ汁も鱠もさくらうな 称美之
梅をひとさの茶釜むなとゝ代 嘆息之

此外に浮うなくうなるうなの類にしとまし思うなにしまて
まつるし此ゝ代といつる其中の代之此外類の平那ハまゝのなて
しうなの類なるし上ゝしまひはゝ常にしまて切出し又切なり

俳 河津みしや明浦かまゝ涼花代
日撰其外集ニ夕涼とありけり

一ヤも代と同様ゆゝ四様五様の事あり
称美ノ哉 下侍ゝあれにも山のさゝろ代 涼花
歎息ノ哉 数利に浮世のちりの落葉うな 夫波
治定ノ哉 抱有ゝ湯井のとりんに月ゝ代 涼花
浮哉 雪近う椎の小葉を引うゝ
行 万山の月をゝる代
猶欲流代此類之多句にハ分に切字有通し
称美ノ耶 美雪や実もとおそひそめに袖 涼花
歎息ノ耶 死もせぬ猿蓑の果や秋の蓑 羽
疑ノ耶 梅清とのとハ金そや春の月 涼花
口合ノ耶 咲や此梅を難波の橋の反 金
切字之事

一歳もうなやそうゆゑ青れ春や いなしめやもなし
なれや
たんぼある切なんこ子の句ふるたの如し

現在ノ切

連 雪をしし山おかしとも峯の雲　志雪
俳 杖しをし梅の山路は照せとも　春波

門

連 鳥の鳴秋にもたをく雪の山
俳

幾

連 歳うさしき秋の都の雪の山
俳

奴

連 秋更ぬ松の夜嵐 時は今歩
俳
連 芝年ぬとし切て之前段の俳ふあり
忘しなれ神の芳を松の花

俳
なの字ふんぼる事之ゆゑしなれ神の芳をと拵てる之
語口傳

幾

連 歳暮いく本の笠の袖さ九ら
俳
只我と云詞に俳りる史切ふ之

伊左

連
俳 人は不知人をて柳様うな
いさしきとさいふ知と書之歌に
「人はいさしらも志しらしは
笠をむかしの香に匂ひ来る　貴之

誘

連
俳 誘様おそひ立ちいへとるとも　深花

いさゝと謂る時ハ漢と書ずし歌に

伊勢物語

「いさ河ミツの小河の人なしハ

都のほとにいさとましし哉

左良波

連 さゝれハ岩と志ぬる人　時ある

俳 いさゝしハ高足山ちゝふ家まく

於波

連 おふをハおもゝハぬせりな枯野

俳　翁

耶和

連 都やハ霞ふの色の峰の松

俳 やハとぞ子ぷ波伊勢の宮に

人のんのあられやハきえぬ

あられやハきるあられハせぬぞとかくとえ

「春の夜の闇ハあやなし梅の花

色こそ見えね香やハかくるゝ

香やハかくるゝかくれハせぬるそ

沱之

連 月細しかゝるやかすりかく影らん

俳

沱ハ上に鼓の字なきなれハ第也之されとも鼓人の句あれハ

とまる之字に

「久かたの光のとけき春の日に

志川心なく花のちるらん

春の日と鼓の音あらなく閑之

茂那之

連 折人ハ花小恨こぬ風もなし

俳 鳴るかわすれて声もなし

乙由

梅花傳發句部 巻二目録

蕉大家三十三法
吐露金風得
此二ヶ條極秘吹

三十三法
一頭両脚　鶯や柳れうしろ藪れまへ　翁

同
二頭一脚　俗鉢只歳死物　ちれ松　全

面白味

勺法四格

木のこゝろはけも鈴もさくらうか　こたせ成

三十三法
抜うき水のつゝとゝれ出る中山路の那

枷
面ゑうはいはゞとゝえん小万花盛の夷の年呉ならん

尚一座の島をの人眼前の帯しきそこおもしろき

事のこゝ作りたまふなり

淋味

古池や蛙花辻む水の音　全

可笑味

ひり茶にかゝり風うきし瓢成　涼兎

三十三法
そ水もの小さいる柳の志かへの那し

時節ノ感

猫の恋やむとき、関のかなり月　翁

朧月の情はいはゞ成といひんに二月よりさりし猫の

恋止深生のをしらん無もちりくちらふよんの月全

霞も鳴りくるあるし時雨を作りなるべしに
「奥山にもみち踏る事嶋鹿の
声きくとうて秋ハかなしう
猿丸古文

△躰格二十二法

即與躰

むりしう事秩父夜さく角力夜　翁
草中の草曲義にしてつ産一具の云捨之勿論脇せ産一軸
其説なとにもせ思なり
墨蓋
淡らぬとも体植なりい簑と以立　全
稱語ふかくらに狭む元志髪　全
郡て蓮風の句絵に書く姿を定との敵之躰に其ハ
簑笠ハ洞雲の黒絵鬘髪ハ菱川か浮士絵なりきやかく
分品にワリれたるを此躰の全とは

盛圖躰彩色

句讀格

忘れ草ハ少夜の中山にて深め
かくのつらし下ニ草子にて上とり云はくるの云波を云之

追善格

親秋風に折まく出しう栗の枝　丶
其ハ松倉嵐葉を悼ふ句之かなしやと有色ゑを悲しう
と切字入さるも追善の一法にして發情深き切なり

狂親疎老若
男女幼少即
今遠忘心ノ
句作アリ

疎今ニハも月れとしやこ月しる雨　立角
老鬢の身乃かりきるをいまゝ何ぞれとも子子とも追善
の句をとゝまる句絶之
老蓮の葉にたちや深き雨　張姿　乙由
若宮蟬やそふにかくみの落田織　茂好
男梅おれて新なるゝ水の白ひ　夾波
女子句しもこそ親ぬれて女郎花　茂好

追福

紹鷗忌の茶をたくとも志らざりき、　支汲

即今風に露くみしや丈も霧乃え、

遠忌山の端に月の後を今迎へ　樵

追善なる楽の声玉なおすたり蝉の声、

亡人の茶をのみ事あらしめ多は御佛供養の如く

手向をやおりし花無しの秋の神　支汲

亡き人の冥賛哉は池泉あるをたのしふ追福の如く

万子前田家跡の守護神なりしと幼あり筆

を向けたせり

追悼

悲しさや石に蕭関も苔せし墓　兎角

昔今絶ら涙落ちくるゝの言葉に忌むべし

春の野日追善追福は志を忌みしく追悼は初やうと

なくしらく

葉花なりと書たる経文は佳書とし宗寿をのうち

書の経文あるは是は雲上なりとも追悼なとは筆上

に出すべし

歳入

初の本に　鶴鳴る几　梅の内　舞

鶴なくなる洛外の里に詠むる声の鳴るを歌詞を

たち入るなり

疊字

疊語

花たと七色七光　御縁　八重さかり、

豆彩に豆梯せらぬ床の山、

此あるの余浙今の茶に哀し

平三段疊字九字に

あし引れ山に山がけりゝ山と

初花にやすらふ秋の色なり

回護

別れにく行く鳥もゆきの恋したへ、

しくむつきあをたてまたり家語に孔子流言不極

變態

霧とくくんぬ浮世をうちや

芳隆ふ小ふ入るひ西之人のといくの清水とその嘆之

上人の音に

とゝくとゝ落る岩ゝ苔清水

沸かしたかとも有き信底うか

此音にとくくに滴や前のとくくに速うなり音に

變態のあまりうゝを見るくし

三十三法に

田つ枝うつ音ふやなき代

記ノ解

乙と里ハ皆花鬘の　子孫かや　蒔

花垣の底にしの句之著之本門院より南園堂の前に有し金

さのしを御所にうぼんとあるし小大鹿惜くふまされし

三十三法に

説ノ体

此句すべき花ハ五盃一具四つ天

黒の様ハぬ花ハ何ハ花ハ

現を十を入るに以ひこまりたる様

統れ体とゆふ之

を却ひ祈しかひ茶をちらんとして美垣の底を下されし

なり長事を生徒作りあふ句之

繋要

面白く折しかなしう　橘祖　代　莉

かなしうおもつかなうおもくなる作虚を笑にとちく知たるなり

奪胎

雲折く人を体もる月ゆゑ

西之人の音に中く小折く雲のかくるさそ月を見てなるなり

なりきりとあるを生月と人とを奪た以歩り

換骨

梅さくく折ゆ前に　笑の　月　支考

梅ハ花ふ様ハかりて世の中小何とくれハほれなるんとの

何る御音のとれも笑の花茶のひとりみとりかゝ梅様

松の音ふなりくるも是皆彩樹のみとり小しく桂月の

清涼をそ点たる換骨の法之

三十三法に

石明もこそうにをし鉢の音

ありとたた人ふ知られぬ

此の果やこそうふさう

石明の月

三十三法ニ
飜轉

袜姫や思ひもうけ無袜たん　係

袜姫のあかりと思ふ玉くしけ思ひもよらぬ燈の志ん亦至要沛

大直

実をしましい力ゝの蟹山　氷　蕗

之実の争姫をとくの人たりけん之ちゝを小義成もきみと
八月田もあかれ力ゝと以つるい湯粒ふかし縦しき一句の
眼目之

春波阿田太吉系乃新物を衣今世の専見そのこゝろの作小位あり

造化と人の作業寫

髪生て容顔青し五月雨　丶

五月雨の比ハ草木繁茂して段際きいうつくしき天地の
形をわすれしと髪もくたる人ふう津したり

三十三法ニ
わすれさうやかさ延されし　夫の雨　丶

一向一反

木枯や何をかれいやさし人乃顔　丶

根賣の居情ある東不也と隣　丶

根賣の居とて煙の隣小息したりけん居の事物とこよ
しやうえされとあわれ成とも小庭しをり賣を衰とし

一反二向をみるへし

雲士夢

父母のしきりに恋し雉子の聲　蕗

こゝろ盤なきくの之此一句に父母子の三つを因一ツと事物の雉子と
かくしたるうち此句の全體うつし芭蕉翁秘中の秘なり

雑句

鈍くさしと誰やら鴻と居ん　丶

和早小新の禾といふあり多くハ花鳥風月を用ひさせり
文に名不お類の句ありけるハ專ら成文作之成いとんと
それハ作句をしやうあらしきもの誰倫とと云ハんほとゝ云

季句を以て作れり秀句の法なり古事を以て笑へされと
万人の年整たるもの事なくしい云用へ

雜ノ躰

かゝ浮ふし角振らよ次ノ此石
次ノ此石の隙京遠近をあらはしつのちかゝきへ云作意を
地年の角のゝ示四句と雲と云句はしあるゝ戦変せ
りとなるを蒼うゝ会ゝ此猩源氏に次ノ此石ハ遠し
渡かとなるゝ云ゝ此ゝ云ゝ地年の角を此二京
の様負せよと云ゝ尚季の地年用と成て次ノ此石の躰
となる私雜の躰と云つり

無季格

年しや猿に若せまるるの面　子角
去し来しまるゝ湯の笑何を猿と云ゝのひらうを
以て云ゝ此一ツの感をなすり而に尚季ハ見へ祈と同

寒旦と雪へ来り後ハ尚季の躰を云ゝ後或ハ用ゝ云かを
く是季と雪事を此格のことをしきとし

四季格

七浦やつ字の影をつ字ゝ　東花
東花の形製へ湖田形実此ゝの作へ雜の句へ何の季
を揃ふしきも其ゝ御ゝ四季の格と定此日常の脇ゝ極り来

躰格二十二法終

梅花侍御祝吐露　重風侍

文此侍の法格ハ慶安のむかしゝ小連ゝ子の成をなし定と以ても只
相と鄙語のゝ如しく更ゝ小連ゝ子の情をなこゝり家をしく先ゝ正法
の眠をなしきゝ百に人をせしゝ要情分明成より後ハ此侍の
字義を立て訊諫の渉を侍へ法に三條あれハ或ハ見事の撰を
ありかゝ門下に三子の徒ある中に十哲の名重出来て頼鄙を

徒らし奇(?)風を學ひたれとも德溪かくして門人を作らすを
旨としし芭蕉をあしとし或ハ二派に分る也或ハ自讃旅宿に
我をたてんとし或ハ未熟にしてく自己の一派を立て名高くならんとし
かし或ハ無能を学ひしく放下の名稱をなして人にすゝめたり
さるからに正風の巷にまよひて学者の手柄を知りてそ世家の道を
さまたけるのみ也人其事に迷ひてかハ是非なくに堂を洗ひ井の壁の
波をよくし端もなくしたりけり　梅花佛や十端古今折を摭て門の
雲をまもらひ花れ雨をたゝしくし徒風流に溺れかゝれり情なき
し此亞䦨ものかハ七とせの昔しなりぬ我七十年来武に[illegible]
ありそ晦くにハ此名を好て つかめの任をうふとも文質を
兼足待も句作の風雅にもかれんかにくるとも道も同し新古の丸く
あらん事數年の實を言さし[illegible]一家の志かしとも文のれと
作(?)く

發句論

柳家翁の名とせる一雲(?)の句を清くく杜陵の詞にたとへり風虚雅
実にあらしく此故に古来和歌の[illegible]の對はハ万古不易とし
句作の詞ハ一物流行してあらかく作し姿情をそへきて姿情の作をあし
以て之[illegible]を化流又ハ未熟の蕉門と名乗る者の[illegible]をしてし
利口をあつかひ又ハ發句[illegible]をとり出し[illegible]是う
今の流行と云る執聞しつ　夫ハ嗚に[illegible]それう
中に[illegible]の文から[illegible]衰[illegible]とこ[illegible]出
眼前に[illegible]の姿に句を[illegible]にしく人の[illegible]の
[illegible]それに風を[illegible]別(傳別アリ)
や[illegible]一ツを[illegible]二ツを[illegible]一ツハ[illegible]の[illegible]
[illegible]姿情句の人とハ[illegible]の[illegible]之[illegible]也

未訓今芳の所にて湯門にて云極る古極之甚元年をうきゝ
陰靜に陽動う清浮を比ゆるれる人物は此さくろ小は姿情も有無も
甚悪も是此も萬物の理を傳へたる一種子之加の種より二葉と稱て
一枝を生し茂実をむすぶ之実小姿情を生ずる事あり而しまれやむ
うしの俳諧は其種の此異のことにしてん清風雅なしの風雅を
たとうことのいんへ神之位なるつしを位ハ家より内におさゝるなれハ
そんとて姿情の一ツを扱ふにあらず物の風姿をんなり物の風情を尊
之是文をん教をもてむ家文家の働き成へし全く翁の句毎に
んを放さるをを味ふ事さ

一唯る 是あの山越ツ 葉さかり 翁

唯る情にしてあの山は眼前の姿之実を山の葉をみて一唯る
いとの情よりあの山と姿かうつ利さらうと情に又茂盛とし

姿に出ず是姿情の古歩くの俳にしてこれの流行なる事し

六儀之事

古今抄に委し弁ず今日小立しりて而和学にさらず抄の旨ことを
傳ずよし今俳諧の教急用をいたし風雅の義を弁として貴
賤頑用とこんう実に祝翁の言語を六義に当て後初の使とも
なれとなくに捨ることを席にも六ヶさとは変り得に六義傳る物なれ
ハ教にも一筆に六義の秘傳あり

風

古今抄に曰風言と訓て意におとへハ
梅の木に猶全り木や 梅の花 翁
口とし木可
伊勢の細代弘氏之事息完とくなれしかん弘氏は俳諧
小名なるへこれ度今の神立之

古今抄曰正言と訓す雅に正しの人をとく

古今序風体
懸改津斤 咲や此也今殆
と成来 絶とくや此筆

雅

日雅ノ体
山さんらあくせ生を見川るに
美ちるくへも凡俗ぬ身に

頌

日頌
出れ石いむしも寄りさき花れ
三様ゆ様に敷はくりしこゆ

賦

日賦体
さく美小なとひはく身れ
あしきなき身の以て
つきれ以前も志らはを

比

日比体
君小と鉢あしこれ家も
おきて以前は恋しきなた
きつやこれらん

與

おりはらいい実も美ふもかくも聚ふ
三十三法二渡あるとおきい菜の蒼代
古から抄日祝言と訓す祿英のんをい神徳佛光をも祝ほ
万物を賀ぐはるへ

何の木の花とも志らぬに月ひ代　舟

古から抄日舞言と訓すかをく美く世地の姿情をのふるとふ
よりしれい梅花菜ならし

梅ワの菜ようさの宿のとろけ
乙段御別にきれし妙く

古から抄日準言と訓す物を比方す云に至るをなもへい
不知夜や海を煮るかとの雪の月
雪の雪と海を煮る程の姿を見るくし

古から抄日誘言と訓す無事を物をに抵さと言ふ事を物をなもへい

は無体
家無きもとも至し
見る破海の海の志所は
まず法くは出せも

西風し雪小やなりしん　雪の雨
見くさる雪を雪ふ雨小無し雪る風情を知るくし

五儀之事

五義といふは五の事を以テ一義を調ふをいふ　連句は雪上の句
三句なれは雪義を三句に含へきなり

篇序題曲流

「五月やこくし橋山のおとくうは
おほつのなしも　鳴渡るり那
鳴鳥舞横としふや　水の上
五義幾ツ見るくも　雪意を五句の所今に含へきなり
外和身に言ふ事く変拾くとも　雪小一理万通さくし

十躰乃事

十躰の事なへ身仙達の撰めひこく　座訓とあれけれとも雪花を

知人稀人生も此十躰を立しは尊詠人己の好む處
のみにかゝりて得る躰は此なりとおもふ
廣く躰製を扱さんとの教なり

幽玄躰

「有明のほれなくしなくしなり
あうつ支たるの東うきことのはなし
あくとりは清きなくも秋の風　荊

長高躰

「よ和のこゝろ上なん葛城の
高雪の山の峰に志し　雲
六月や峰に雲おく嵐山　〃

有心躰

「あうつ〻ハ又さの頃や忍ハれん
うしとこしよそ今ハ悪し死
頼く死ぬ年笑ハ見人に頭の夢　〃

事然躰

「年〻来る宇治の橋なる夫とゝ
幾世になりぬれのみなと
四つ〻ハ万葉迷し梅の花　〃

麗躰

「鶉鳴まのく入江の滝風小
尾茂波なる　秋の夕くれ
清澄や波にちり込む松葉　〃

見様躰

「村雨の雲もまゝ見ぬ様の葉に
雲半ちのなる秋の夕　蕉
居るゝの水様ハ高た喰れ鳥　荊

面白躰

「人住ぬ不破の関屋の板庇
あれこし跡ハそゝ秋の風
名月や池を見てゝ夜もすがら　〃

濃艸

一筋有艸

思拉艸

姿情論

右於蕉門秘記而急務之要章至〻依
懇望而令附與之禁他見是吐露傳奥盡也梅花傳奥書
右聞書梅花傳附與之修之我家要語
也禁見而常納于函底可矣

幾曉庵卯

明和四夏自杉呂子傳羽毛寫

金毛要諾書写　凡例

安東沙弥ゟ如此ニ書ひし源本ハ草書なりしかれ成ハ年代
ゆへ出し如ハ浮小出入られしつゝ見へて細書する物あり
薩州ひそかかたなきたえて　麻少異書
春波田と書する物ハ毛とより東波田東云と細書せしもあ梨
又本朝の旨に細小年書するもあり為一流小本朝より一二字
代りし異書之
源本草書なり私古語古句を出して其態をいくてりし合ある
ハ繋をかけし引合物あり薩州ひそかに二の字を波を加
て連書之
此如何系の字代理し何系の句引とぜ出て古字古句ハ書とさ
ひて安東沙小をいして書載して考に其のゆるのを

風語編をあらためもしは年越年拙をかゝる是をわが写えの時
家人病婦のしに湯薬をとるのいとまに竟成と称し
かは古写のあやまりも多し坂板正元して猶依安東洲再
是をもとし給

延享甲子仲夏

芙蓉城隠士

蘿洲源　子白謹題

金毛要語

発句

市論曰発句是大極の一章にして虚しかるべき実にとゞまれる
本より原理もなく理屈もなく詮もなく式もなく畢竟
信の一字より無物を名人と初んとにありて上下のほぼ是論する
に及ばれ共もし俳諧の一事と云ふ是家名に向ひて松をかゝむ事
之事なり忠極山旅水に人とくれ知いふにも虚実のさりひをんに忘
れ其家身の原理に是他人の理屈をもとめし他人の原理にハ
家身の理屈をもちて論理に門人とさとし給ふことく是我
其罪の情をやいくも是をもて三論の法をさいきゝ方一に竹木鳥
獣の名を志るハ風姿ハいかむ風情をいかむと平生のんに云れ
さらん哉れを俳諧修行の人といふ也

中椿にいしやとらかの毅句にて句作ハかくて深遠のたぐひ之
井田哥も発句の実情とハ彼いふ虚実の実なれはけりて風雅
の兆となりて再世に発句れ末をたちつけれに附句の上手ハ千変万変
の作となりて如に虚実の虚をあつかふまりた只此理を知て此人ハ發句
も附句も上手なるんとかとくに一句の実前句の虚をに居て自縛
の位ありて哥人と云余れ此句を以ふある弟子も此理を知りかふ故に七十
二分の文録ハかの句を以て我発拝余例不録とよかつ実情と流れよのきと
是戴して定理を知ならぬ発句ハ一生たゞ一句もれし知て出さん人ハ
妙とらし也へし知らせさらん気を和すし是非て万法の理ハ知れとも
及に一字の位あらされハとて殊に此句の先例なる実情ならまゝの
従文を并せたい

麦かりし猿の歯あらし峯の月　　其角

塩鯛の歯くきもさむし魚の店　　翁

これハ其角の猿の歯ハ例の詩を手ばなす所をしりて猶くとふ字に此場の
情をは合し峯の月に寂寞の姿を写し句作り常しあつめぬれハ人をおどろ
かさて発句となりけり秋霜の塩鯛ハ塩鯛のなりとして此塩を見る人も知ぬ人も女子も
童部もいふ迄も有れとも十分の上手とても及はぬ句とはなれるまなる
実に初心と名人との心ハいふ変ハあるなしさなれとも名に高名なれ千里なると
位を通しおるいふ其角も宗匠もさる（塩鯛の歯くきと案させとも魚の店
いはんかく塩鯛のさひれ木立の春をもせ桜の花の風情をもちひて高深微妙の
妙入をもて通し紅葉ハ白き秋の荒の詞をしていかにも尽くさす
あくしる魚の店のさひしさ深い誰か此の作者達の手にも金玉を
なして中より童部もまつる魚の店をいふ美妙を成の境地をの
しらるに優游自在の名人ありて一字の速定の手腕なるさる人や

来湖曰青子か発句ハ詩哥の風情何にくらして猿帰嶺ニ月かな
いふ事やハ杜詩の句なり全く此発句ハ奥梅に俳諧の風姿拙き歟

十論曰 注ニ変にかなの訳文を評せい
・有歳月ニ備(中)ありし雪の 夜かな 領
・初日(?)雨や 蛙花こむ 戸の音
・これハ此類を多ありし事の誹諧に在ることをばくさる此外に人の事一つ情あり
盗やうしていふこの事をも征めむも是れ誹諧の是一をおしては仁外
ニ情を換くる故これを詩歌の餘情とも文章の優美とも云ふる也
十論第五姿情論の后ニ風言説て情く虚あり 雅語 虚姿 とあり 本事や
寿湖曰 雅俗にして風あり 姿中の情あり 風言をもって雅俗あり 情中の姿あり の秘く
さくにあるを見るべし
・十六夜や海を恋ふる月との 雲の 窗

とかる名句なくしいまし十六夜やとしいへる是雅俗あり 海を恋ふるといふは風
云之 此十六夜やと云ふ事る姿中の情に海を恋ふるとえたる情中の姿あり
頼政の哥の表之なり表ハ雅適(アツカレ)ハ俗ゆゑ是と見の雅俗といふ
・十構帯弁ニ曰ク言葉の外の主眼くあらわしてハ俗語 もし強て添しても雅なし
助字要辞を助字ハ同意複而可知物之差別と是を知れハ言語音韻の
二つより勝負も是早もあるべしは是謡ハ音のあつかひ此くハ雅俗ハ韻のひ
きといふ句しこれを見え花とも見え後人皆音の母を変ひあり雅俗の歌
のひきはなんぞ不て後人あやまる不雅之
椎帯弁が云本梅のきに西行の哥に
・山人に花さくらハ思ふやらんと見えぬれ登
いさ知らず雪と思ふ人こそ雅く
右の哥も是を雪といへる雅語之事外の年情の俗なる之

不用を志れば之を次にさひしことは風雅は隠者のお徒なれば大とひ
猛将勇士の家にも業人のさひを学ぶるまとゝいふ馬のんを和ら
・帯むとへ志るにおかしことゝさひしことゝ和はとちらも雅俗のさらひあり
て人れ心のをつかうをられてをり返信は俗家の法人あさ内乃水
鶴のをくられて法は雅人のさひやさる我をくかれて笑ふ人も
あれとそれを巧云令色といひて文少を帯は力味といひ武にをけ登馬
呼とかふ

春波曰 三條ノ法ハ人和トハ天理ノ大道ナリ天ノ時也地ノ理也人ノ和ナリ
時理和ハ一躰ナリヲカシミハ虚ナリサミシミハ實ナリ此二ツ以天ノ
道ニシタカフナリ

・没滋味 一碗菜

浣汁や沙戸にあらぬ恍かけふみ
此為ゆへ椒の木よくし

さるに大小の理をさきをいてく茅句の狩にちくめ書るは理るにまとはさる
作者といふ風し

春波曰 コレ虚ヲ実ニテシツメタリ実又虚ニホトクヿ如此

俗を家より同におさり徳望人より外にあらハる

・佛ハ施賊施老云送賊送儒にも大裁乎死之死生非今之急後自
知之といふ儒ハ多ハ世法をとしあつて

・佛俗いつき虚実の実我おさあひて有用をゆゑ婦ハ但ハ虚実れ
虚にあそひて世法の無用をものしまむやそこ我職文の秘訣とは以り
佛俗の者僕に無分別の無農字いふ所に敵し有ハ狩の者は細の字の意之

・是非ハ百人を志るべく親疎にハ家を忘る風し

春波曰 人和ノ人法二ツヲ捨テ三ツヲ扱ヒ一ツ二アリフ

風雅虚之雅ハ実之と整されハ主情の理に動きて其姿の変に新なる

の論にあらずとぞ

夕ぐれは揚屋のともしれ出して
錦にまがふ隣のさんこ玉

発句も附句も短句にあらずして句作は後の変あるを知るべし
異辨の方法は陰陽地の外にあり
一齣一切軒といひし附句附合は一理なれとも例の附句を知るに
あらて附合事を後にあらはるゝ之

角前髪の小くし花活
咲花に獅子のさくら綿摺なりし

随類得解機縁の時

此村にたまりい菖蒲の花を投て
おくりたる歩み局の夕ぐれ
此附方前よりなりし

きさやる草羽織を着はれこ
華洛の繁に誰もかくらし
華洛の繁は此之誰もかくるゝは用なし東
両輩りの短句をとりかへて句作之

出日招くらし 禱の 幟みの
門渡のかたも伏たゝせし　去来
伏見は短句にしてかせしきりは句作之

句作といふは二句の繋にして文法には類調といふ連俳に附合といひ
又文章にはつゞくるといふや誰といひ事といふ姥の處といふ句の
尾韻ともいひて次の句のうつりかはる事短句は前句の噂をさし
前句の外れぬ色し句作は前句の用をとらへて前句の円轉
さむを論じ短句と句作はかくのごとし前句の事跡といふといへる
つて一歩を置の事のひなれは等句に思創ることは岩や出之ハ也

たるひ不知唸ふとも定いふ知恵るとも所むに俳僧は定日の時空
なれいさしむらふ人の接拶にして所思句は心ハ思ふ筆人その心法
の大切なるむかしの俳僧も是我して定の理居よりも先れ今の
俳僧も是をしてその居理よりおさまるなり実に奥疲の一理な
りと志らは居理の天なるも理居の人なるも語句と句作に此後あ
てあれ所用の差別なるをも志る風し此語句語句を二様にはくり
し此所の美和に僅文あり

桜桃　世に俳僧を思ふ人も多いふ所合の微細なる我当をしてこ
男は此女はとんをそへて桜桃をれは唯人の利送にして桜木も
是誠入居とさきつくさらけ家のこかく思ひて人は合点の所思
筆なる案 情は不見 姿は不可 各人は胸に家理なく家句は姿の服家に浮ひて
こ男もこの女も人あのよしあしも衣裳の摸様もそ思ふ人志れ

は所合の語句といふは家句の中にそなりて句作は家の用を以て
面顔は面句なり一字延も知ら求る事なし此故に変化論は無
分分の三字我語ふやう

春波曰　一句ノ作ヲ主トセス前句ノ姿情ヨリ作ヲ生スヒカ胸
ニ我理ナキ也発句又カクノコトシ

眼前の姿

彼は顔を入るゝ
事ニ大名をりは虚　なるゝん
さらしいふ楚は謂彼なり
ふり神にむしらふ　清名を筆をふて
世是さらのはまに　母親我　供

米曰　語句は家句の中に楚ありて句作は家句の事をいふ案
志るに家句を楚意し何をしてよりに尋ありて新しき作をん

中村俊定文庫